■挿話　宇宙戦士レビン

王族警護隊上級指揮長レイネンスルエにとって、今回の任務は荷の重いものだった。

「ヨハネス三三β宙域の人民を、宇宙滅による崩壊から死守せよ。」

それが、その任務内容だった。

レイネンスルエは、その魂を、この「意識の鎧」に移植して以来、数々の任務をこなしてきたが、王族の警護とは異なり、守るべき対象が、あまりに幅広すぎて、自分の能力を集中させるべきポイントがよくわからなかったのだ。

宇宙滅「虚無の闇」は、発生原因もわからねば、拡大の方向性や、そのタイミングも不明だった。宇宙の辺縁系全体に、その闇は広がっており、この宇宙そのものが縮小しているというものもいれば、単なる空間のガン細胞のようなものだというものもいる。わずかに、「腕の伸びてしまった銀河系では滅の発生率が高い」という噂がある程度の信憑性を持って語られている程度だ。

しかし、辺境地域の警護を任された彼にとっては、そんな仮説など、何の役にも立たなかった。宇宙滅は、ある時急に大きくなる時もあれば、宇宙空間のある空域に突然巨大な球体として発生することもあった。そのパターンには一定性などなく、現場を指揮するレイネンスルエは、ただひたすら、宇宙滅の発生にあわせて、「危険にさらされた地域の人民救出に出動せよ」と大量の人員に命令を出すだけだった。

くる日もくる日も、宇宙滅の拡大や、発生がないかを確認し、その発生が起きた時は、毎回、部下から伝えられた発生地域名をオウムのように繰り返し、その地への戦士の出動命令を出すだけ。まるで、機械のような作業だった。どうしても「人民を救っている」のだという実感が伴わなかった。

「グエラルント大王さまをお守りするのなら、話は簡単なのだがな。」

もう、何度も頭の中で繰り返した、誰に言うでもない愚痴を、今日もまた自分に向かってこぼすしか、他にできることはなかった。

「慈愛の王」と呼ばれたグエラルント大王は、従来のルールを無視してでも、多くの星域を平和裏に統合あるいは調停していった。その過程での全権大使など、困難な仕事にも対応したし、その前には、既存の権益集団による敵対や、暗殺、謀略などに巻き込まれることも多かった。

どんな対抗勢力が、どんな謀略を講じ、大王さまを失脚、あるいは

暗殺するかを前もって想定・検証して対策を立てるのもレイネンスルエの重要な仕事だったし、各種の暗殺計画を阻止するために、先行して敵対組織への潜入捜査を行ったこともあった。

しかし、そんな有数の戦歴や経験、知力も、この宇宙滅「虚無の闇」の前ではまったく役には立たなかった。

「潜入捜査も、宙域警護も、人民の命を守るという意味では、同じではないか。誠実に、その任務を全うして欲しい。」

というグエラルント大王の言葉だけを頼りに、レイネンスルエは日々の単調な任務に耐えていたのだ。

「しかし、大王さま。あまりに『虚無の闇』は理不尽すぎますぞ。いつまで、この先の見えない『警護』を続けねばならないのか…。」

と、レイネンスルエは、司令塔の巨大な窓の向こうに広がる、虚無の闇の不気味な静けさに、今日もまた同じ問いを繰り返していた。

突然、扉が開き、部下の一人、ユイラスクンナが飛び込んできた。

「レビン、今度はドンゾーです。闇の腕が急速に伸びております。」

ユイラスクンナは、レイネンスルエを呼び名の「レビン」で呼んだ。愛称や呼び名で呼ぶことこそが、この星域での尊敬の証なのだった。

「ドンゾーだと？　あの星は、星府もまともに機能しておらんのではなかったのか？　ユイラス！」

レイネンスルエこと、レビンも、ユイラスクンナのことを、略称で呼んだ。レビンにとっても、ユイラスは、尊敬に値する人物だったからだ。二人は、この地で初めて出会った仲だったが、妙に気が合った。

「ええ。ドンゾーは民族間抗争が激しいですから。意識通信で星全域に警報は出しましたが、とにかく司令室に来ていただきたいのです。」

レビンとユイラスは、急いで司令室へと向かった。

司令室の立体像パネルには、惑星ドンゾーの姿が映し出されていた。宇宙滅からは少し距離があったはずだが、この数時間で、かなり大きな宇宙滅の腕が伸びており、宇宙滅が、惑星ドンゾーの片側を手のひらで包み込もうとするかのように、覆いかけている。

「こんなに！」と、レビンはおもわず、驚きの声をあげる。一瞬の沈黙の後、すぐに指示を放つ。

「四十四区域のヤンナル一個師団を、ドンゾーへ配備。チュイントンの監視団は、司令部要員を除いて至急ヤンナル部隊と合流するように指示を。私もドンゾーに向かう。現地司令室を緊急設置。戦艦ヨイトナ…いや、ヨルスナでいい、ヨルスナを現地司令室として配備せよ。私はキメラで、先に現地に向かう。」

そう言うと、レビンは司令室をでていった。

「レビン。私も、ともに。」とユイラス。
「うむ。だが危険だぞ。君には鎧がない。生身では耐えられぬ事も起きるかも知れない。」
「いえ、お気遣いなく。それより、ドンゾーには知り合いがおります。何かお役に立てるかもしれません。」
「わかった。」
こうして二人は、小型高速艇キメラでドンゾーへと向かった。

※　※　※

ドンゾーは、まさにパニックに陥っていた。宇宙滅の恐ろしさは理解していたものの、他の星域に比べればかなり遠いと住民の多くがタカをくくっていたのだ。
何よりドンゾーは、その三つの月と、そのそれぞれの月を命律とする、ヤマイ、ユイノ、リネスン三つの種族が互いにいがみあっていた。そのいがみ合いこそが、彼らにとっては最優先の課題であり、宇宙滅への対策に意識を割り当てるのは、それほど優先順位の高いテーマではなかった。
ドンゾーでの争いは、貿易や通商のルート、友好星系との連携などを巻き込んで、辺境の地、ヨハネス三三β宙域全体の、争いのタネとなっていた。
宇宙滅が星全体に襲いかかって来ているという情報が行き渡ったのか、宇宙港は、人であふれかえっている。中に入れなかったドンゾー星人は、それぞれにいがみあい、ののしりあって、三つの種族同士が、たがいに乱闘になっていた。
「誰か統制を取ろうと言うものはおらんのか」小型高速艇キメラの中から、その様子を見て、レビンは大きくため息をついた。
宇宙滅が現れる前にも、レビンは何度も、このドンゾーの地の停戦条約締結のため、全権大使として訪れている。
「もう少し早く停戦を進めて、中央星府を整えておけば、こんな事にならずに済んだものを。」と、つい、レビンはつぶやいてしまった。
「あなたの責任ではありませんよ。ひとえに、いがみあう、ドンゾー人民自身の問題、そして決して重ならぬ月の命律の問題です。お気になさらずに。」
「かも知れない。だが、どうにも割り切れなくてな。ああ、まだヨルスナが到着するまで、時間があるだろう。とりあえず、滅の迫っている地域の様子を見たい。キメラを、滅の手のひらの位置までやってくれないか。」
「了解しました。」

※　※　※

滅が襲って来たのは、グゥアリィレン経緯度で、緯度マイナス四百四十八・四二九度、経度六百二十四・三三九一度の地点、ミミホロのあたり。ドンゾーという小さな星の中でも、貧しい民族が多い地域だった。

すでに宇宙王族警護隊から派遣された新人類戦士たちは、その任務につき、数多くのドンゾー人たちを、安全な場所に移動させるべく、小型艇や各種の輸送廷、兵站用軍用艦まで駆り出して、救出にあたっていた。

「がんばってくれよ。」と、レビンはキメラの中から願わずにはいられなかった。宇宙滅の進行スピードはまったく予測がつかない。まったくピクリとも動かない状態が続いているかと思えば、ある時は猛烈な勢いで侵食が進むのだ。いままでそのために、救出計画が大きく破綻し、想定以上に多くの命が奪われてきた。予測がつかないと言う事ほど恐ろしい事はないのだ。だからこそ、滅が出現したばかりのこの瞬間に、どれだけの生命体を、戦士たちが助け出し、遠くに運ぶ事ができるかが重要なのだ。

すでに宇宙滅は、司令室の３Ｄ映像で見た時よりも、はるかに高速でドンゾーに迫って来ていた。ミミホロの上空には、すでに空がなかった。ただ、空虚な闇があるだけだ。このスピードが続くのなら、いまに、わずかに残った空の雲をも呑み込んで、ドンゾー人の住む大地にまで降りてくるだろう。

戦士たちは、すでに何度も、こんな状況に出くわしていた。まず何より、原住民の避難が最優先。そして、次に必要なのは、迫り来る滅の「足止め」だった。

中型軍用艦の砲台には、ハーレンシー砲が据え付けられていた。滅の動きを一時的にでも停止させられるのは、ハーレンシー砲以外にはない。

船首のハーレンシー砲を、中空の「滅」に向かって次々に放っていく行く。大きな光の輝きが、滅に向かって一直線に飛んで行くが、発砲音はしない。滅の中へと潜り込んだハーレンシーの光は、闇の中で光の玉となって輝きを増し、その光の部分は虚無の闇の状態から通常の空間へと姿を変える。この方法だけが、唯一の虚無の闇への対処法なのだった。

「これだけ大きい宇宙滅の腕だと、大気圏外から、戦艦クラスの大型砲でハーレンシーを打ち込まねば、足止めにもならんな。」

レビンは、状況のひどさを的確に把握していた。戦艦の到着を一刻でも早くしたいところだったが、物理空間の移動は、どうしても時間がかかる。まだしばらく、宇宙滅の進行を止める事はできないだろ

う。

「もう少し近づいてみましょう。」と、ユイラスが言う。

と、その時だった、「滅」の手のひらから、猛烈な勢いで一本の「指」が、地上に降り注いで来た。宙空では細い糸のようにしか見えなかった「滅の指」だったが、地上に降り注いだ時には直径数キロの範囲で一気に空間が「虚無の闇」となってしまう。

「いかん。『杭い打ち』が始まってしまったぞ。ユイラス、急げ、離脱だ。」

「了解」

レビンとユイラスを乗せたキメラは、降下していた機体の機首を上げ、水平飛行へと切り替えた。「杭打ち」が始まると、そこから滅の侵食が早まることが多いのだ。また一本「杭」が、ミミホロの地へと打ち込まれた。レビンたちは、ちょうど滅の手のひらの下に潜り込んだ位置にいることになる。できるだけ早く、広い宇宙空間へと抜け出さねばならない。

眼下では、杭打ちされた「滅」から人々を救出するために何千という小型艇が降り立ち、次々にドンゾー人を運び出していた。「杭」からは、細い「根」のような滅が張り出し、それがまた地上へと打ち込まれる。少しでも滅に触れてしまえば、もうそれでお終いだ。生命は停止し、いずれ滅に呑み込まれてしまう。

戦士たちは、それぞれ腰に携えたハーレンシー砲を滅に打ち込みながら救助活動を続けていた。大きな滅には数名から数十名が一斉に滅に向かってハーレンシーを撃つ。それでしばらくは「根」も張り出さない。小型、中型、辺境地域に駆り出された、さまざまな軍用廷が次々に降りて来ては数百人単位でドンゾー人を運び出す。そして、空中で待機している中型軍用艦へと乗り込ませ、また地上へと戻ってくる。数百の中型軍用艦が空に浮かび、そこから小型宇宙廷が降りては登るという作業を繰り返している。

レビンがキメラから地上を見下ろすと、あれだけいがみ合い、停戦条約の締結にも道筋すら見えなかった三つの種族、ヤマイ種とユイノ種とリネスン種が、たがいに助け合いながら、軍用艦に乗り込んでいた。

ここまでの危機が訪れないと、協力しあえないのか。いや、いくらいがみあっていても、同じ星の民人(たみびと)同士、命の危機には助け合える程度の善良さと賢明さは持ち合わせていたのだろうか。どちらとも言えるし、どちらとも言えないその風景を見ながら、レビンはなんとも言えない感慨にふけっていた。停戦条約がもっと早くに結ばれていれば、いまごろはこの地にも、大規模な空間転移装置が据え付けられていたはずなのだ。

「あと、10星時か。」とレビンはつぶやく。「杭打ち」が始まってし

まえば、もう、その星に未来はない。どの程度の時間がかかるかは別にして、星が滅に飲み込まれるのは間違いないと見て良い。

だから、滅の下に潜り込んでの救出作業も、離脱の時間を含めて、その星の時間で10時間を目処に打ち切られていく事が決まっている。

キメラは高速で滅の手のひらから離れ、「杭打ち」作業が始まっていない地域へと移動している。杭打ちが始まっていない地域では、まだまだ種族間での争いが収まっていなかった。救出船に乗る順番や、移住先への不安、救出船内での待遇や不便さなど、不満のタネはいくらでもあった。

「そんな事で時間を使っているヒマはないのだ！」と、レビンは思う。私はお前たちを救いたいのだ。そのつまらぬ争いをやめて、ミミホロのドンゾー人たちのように三種族が、共に助け合う事はできないのか。その混乱のせいで、より多くの命が失われるのだ。三種族ともに。

「困りましたね。もっとも命律が混乱するアウトナ期に滅が起こるなんて。」

「そうだな、私は本当にアウトナを憎むよ。この混乱がよりひどくなれば、星人口の三割も救い出せなくなってしまうだろう。」と、レビンは予測した。

この星の一年のうち、三回は、三つの月の命律がぶつかりあう「アウトナ期」を迎える。この時期、ドンゾー人の精神はより一層不安定になり、あらゆるルールが互いに矛盾しあって大混乱を巻き起こすのだ。それは、この星にとって、年中行事と言っても良い。

ドンゾーの月は、それぞれに強い磁気を放つのだが、ドンゾーの三つの種族は、その電磁波とリンクした精神状態を持っていた。アウトナは、その三つの月が揃って近づき、ともに新月となる最悪の期間だった。レビンの停戦のための活動も、つねに、このアウトナの弊害によって頓挫を余儀なくされてきたのだ。

「あの月が、せめて一つであれば…。」とつぶやいて、ふとレビンは気づいた。

「そうだ。星がなくなる以上、月だとて残ることなどないのだな。」

「どうしました。」とユイラスが質問する。

「月がひとつになれば、救出作業ももっとスムーズに進む。そういうことだ。」

「え？　いまから月を破壊でもしようとおっしゃるのですか？　それこそ時間が足りませんよ。」

「いや、そうではない、月からの電磁波を防ぐだけだ。宇宙虫（うちゅうむし）のセラブンを極反転させれば、ドンゾーと月の間に電磁波シールドが張れるではないか。」

「そうか！なるほど！」とユイラスは思う。

宇宙空間での連絡は意識通信の開発によって、リアルタイムでの送受信が可能になったのだが、そこには「宇宙虫（うちゅうむし）」の発見が大きく関わっていた。宇宙空間には、全域に何十万種類というナノサイズ以下のマイクロ生物が浮遊しており、その宇宙虫が放つ宇宙虫間連帯成分「セラブン」が満ちている。

このセラブンを媒介とすることで、意識通信は成立しているのだ。セラブンの特性は、さまざまに実験され、一定のエネルギー波を照射することで極反転し、電磁波シールドになることが発見されているのだ。

「さすがに、宇宙通信工学科ご出身ですね。それは思いつかなかった。」

「いや、政治的な意味で、この案は前からあったのだ。ただ、どの月を残すのか？　という点で、どの種族も納得しなかっただけだ。辛い事だよ。しかし、いま、この時、滅に食われる前、民人（たみびと）を救うためなら、独断も許されるだろう。その責は負う。いまから道筋をつけられるかね？」

「わかりました。救出中継艦に技術長の知り合いがおります。あの艦砲にエネルギー波を仕込めばなんとかなるでしょう。連絡してみます。」

「もうすぐヨルスナも到着する。そうすれば、極大ハーレンシー砲で滅の進行をかなり遅れさせることもできる。月の統一で救出作業が安定して進めば、ドンゾーの民の九割は救えるはずだ。なんとか成功させよう。急ぐぞ、ユイラス。」

キメラは、夕陽の中、中継艦ハマセへと向かった。

※　※　※

「命律を侵食するということは、重大な宇宙令律違反。特例は認めらようが、何らかの責任は問われるだろう。これは、私の独断で行っているのだ。付き合う事はないのだぞ。」とレビンは、エネルギー波砲レインギュネイトを備えた、小型救助艇ワンゴス１の操縦席で、隣に「見える」ユイラスに伝えた。

「命律を閉ざさねばならない月は二つあるのですよ。あなた一人では、倍の時間がかかります。それで救える命が減ってしまうのでは何のための令律違反なのか、意味がなくなりますよ。」と、ユイラスは答えた。すぐ隣の副操縦席にいるように見えるが、これは意識通信を使った空間映像だった。

ユイラスはワンゴス２で、ヤマイ族の月ヤマイへ向かっていた。レビンは、リネスン族の月エインの命律を閉ざしに向かっている。

「確かに。ワンゴスが借りられたのも、ユイラスのおかげだしな。何

と言ったか、あのハマセの艦長の名は。」
「ゼンドーでしょう。古くからの知り合いで。」
「しかし、月の命律を閉ざすと言った時の彼の反応では、とても、ワンゴスを貸し出してもらえるような状態ではなかったからな。」
「そりゃそうですよ。自分たちの月の命律から、よりにもよってトートーの命律に従う事になるなど、ユイノ族以外の種族には侮辱以外の何物でもないですからね。ゼンドーも、もともとはヤマイの豪族です。彼が救いたいのは同族のヤマイだけですよ。ハマセに乗る限りは、地域の長として三種族、平等に扱わねばならないでしょうが、心情的には無理があります。」
「うむ。確かに、ユイノは青き月トートーをあまりに狂信的に敬うからな。トートーを残すとなると、ヤマイが、ユイノの支配下に置かれたように感じて、抵抗は大きいだろうな。だが…。」
「位置的に遠すぎますよ。やはり、ヤマイとエインの方がうんと近い。」
ユイラスは、レビンの方を向いて「しょうがないよ」という顔を見せた。レビンも鋼鉄の仮面の下で、同じ表情をしたが、ユイラスにはわからなかったかもしれない。
意識通信でのやりとりは、こんな、こまやかなニュアンスまでを的確に伝えられるため、今回のような特殊任務には、欠かせないものになっていた。離れた場所での困難なミッションも無理なく行える。
今回の作戦では、二つの命律の閉鎖にできるだけタイムラグは与えたくはなかった。ひとつの月だけが電磁波を停止したのでは残り二つの月の間で、混乱が拡大するだけだ。ヨンナミをはじめ、二つの月を持つ星の種族は、争いを避けるために居住区を分離するか、どちらか片方が他方を絶滅させるか、どちらにせよ共存することすらできていない。
ドンゾーは三つの月があるがゆえに、常に政治勢力が２対１になりながら、バランスを取って、奇跡的に共存が行われて来たに過ぎない。だからこそ、これまで三つの種族の平和調停も結べなかったのだ。バランスが崩れれば、よりいっそう激しい対立になるのは目に見えていた。
月が三つから二つになった途端、残された月トートーと、もう一つの月の間で、文化の一対一の対立期間が発生する。そうなれば三つの月のバランスさえ崩れ、いまより混乱の度合いが高まるだろう。そうなっては、月の命律を閉ざす意味自体が失われる。
人心をまとめるには、できるだけすみやかに、三つの命律を一つにまとめてしまう必要があった。こんな混乱の最中だからこそ、二つの月の遮断は、できるだけ短時間で行わなければならなかった。
「こちらワンゴス２。そろそろヤマイに着きます。そちらは。」

とユイラスが行動を発話する。
「こちらワンゴス１。もうエインに着くだろう。ワンゴス２は、先に受信弾を設置してくれ。」
レビンも同じく状況報告を行う。特殊ミッションだからこそ、確認作業はていねいに行わなければならなかった。
「了解」
ユイラスは、金色に輝く金の月ヤマイと、その母星ドンゾーの中間地点にワンゴス２を停止させ、受信弾を１機、宙空に設置した。
ヤマイ、エイン、トートーと三つある月の中で、いま電磁波を遮断せずに残せる「唯一」の月は、青き月トートーだけだ。
しかし、それが、もっとも狂信的に月をあがめるユイノ族のシンボルだということは少し不安な要素ではあった。トートーは、ドンゾーの歴史の中でも「禍々しき青き月」という別名があるほど、暴虐性に支配されがちな文化的背景を持つ月なのである。
「ヤマイ遮断用通信弾１、設置完了。」
今回の電磁波の遮断では、遮断すべき二つの月と、母星ドンゾーとを結ぶ宙空に、それぞれひとつずつ、「三角の電磁波遮断膜」を設置する事が目的となる。
受信弾にエネルギー波を放波することで、受信弾同士が通信しあい、その交信波が宇宙粒子セラブンを活性化することで遮断膜が作られる。受信弾で「膜」を作るには最低でも３個の受信弾が無ければ、「面」にならない。一つの月に対して、最低３個の通信弾を、限られた時間の中で適切な位置に設置しなければならないのだ。
「うむ。こちらもエインに到着した。ワンゴス１もエイン遮断用通信弾１を設置する。」
ユイラスの的確な操作を横で見ながら、レビンも同じように作業を繰り返していた。これは高度な設置作業であり、経験が豊富なレビンやユイラスでなければ、限られた時間の中で、失敗なく、適切に行えるものではない。
月から送られる電磁波と、それに伴う意識流の潮は、母星の種族の気分と意識の方向性を大きく決定づける。星の統治のために月の破壊や放出などを行った例も増えているほどなのだ。電磁波の遮断さえできれば、人心統合に大きな効果が期待できた。
「レビン。虚無の闇の腕が、かなり近づいていますね。急速に巨大化したりしなければいいのですが。」
「そうだな。あいつだけは予測がつかんからな。」
その時、レビンのワンゴス１のコンソールから警報音が鳴り、映像パネルに士官の顔が映し出された。
「レビン。ヨイトナ、極大ハーレンシーの発射準備整いました。」
「そうか。よし、すぐに発射せよ。」

戦艦ヨイトナは、レビンたちが月の命律遮断計画を進めている間に、すでに到着していた。レビンは、中継艦ハマセから三つの月に向う前に極大ハーレンシー砲の発射準備命令を下していた。
「ハーレンシー砲、間に合いましたね。これで作業も安定して行える。」と、ユイラスがホッとした表情で言った。
ハーレンシーを滅に打ち込むことさえできれば、しばらくは滅の急激な動きも封じ込められる。レビン達の作業も間違いなく確実に行えるのだ。
「うむ。これでなんとか、計画通りに３種族を９割までは救えそうだ。ユイラス、ハーレンシーの発射を待って次の作業にかかろう。無理に滅に取り込まれる危険を侵す必要もあるまい。」とレビンも、ヨイトナからの極大ハーレンシーの発射を待った。
が。
ハーレンシー独特の黄金の閃光は、いつまでも起こらなかった。
ユイラスとレビンの表情が怪訝なものに変わった時、ヨイトナからの映像パネル通信が再開された。
「レビン！大変です。ハーレンシーが供給されません。」
「どういうことだ。ハルミググとの接続不良か？」
「いえ、そうではありません。ハルミググ自体が消滅しました。」
「なんだと？　スアミイ星で何かあったのか？」
「違います、スアミイ自体が消滅したようです。」
「なに？　スアミイ星がか？　あの星が消滅することなどあるわけがない。あの一族は時空転換して消滅までの時間を永遠に生き残っているはず。」
「いえ、それが、どうもその時空転換自体をスアミイの主が断念し、星を捨て宇宙の遊牧民として生きる決断をしたという事のようです。」
「そんなバカな。いったいどこからの情報か。」
「それが辺境地域の一監察官からの意識通信でしか確認できなく、こまかな状況がわからんのです。」
「監察官だと？　それはユルイスナ人だったのか？」
「はい」
「く。嘘のつけんユルイスナ人からの報告か。ならば事情はどうあれ事実であろう。そのまま待機せよ。」レビンは、映像パネルをオフにすると、すぐに隣に「いる」ユイラスに向かって言った。
「事情は以上の通りだ。グズグズできん。作業を大急ぎで進めよう。」
「了解。しかし、これからが大変になりますね。」と、ユイラスの口調も、とても沈んでいた。
永年「滅」の進行を抑えるために役立ってきたスアミイが消滅した

事は、大きな衝撃だった。いや、それよりも、あの自分たちの母星をあれほどまでに愛していたスアミイ一族が、母星（ははぼし）の消滅を受け入れた、という決断自体が不可解であった。いったい何が起きたというのか？

レビンにわかることはただ、スアミイ星の中継施設であるハルミググからの「ハーレンシー」の供給がなくなった、ということだけだった。意識通信を使ったリアルタイムの処理で授受できるエネルギー体はハーレンシーくらいしかない。警備隊の配置が難しい辺境地域では、意識通信で自在にエネルギーのやりとりをできるハーレンシー波は、欠かせない戦力だった。今後の滅からの民族救出作業は、困難を極める事になるだろう。

数ある航宇族の放つエネルギー波の中でも、スアミイのハーレンシーは稀代の巨大さを誇っていた。他の種族のエネルギー波を借りる事もできるだろうが、能力で落ちる事は明らかだった。レビンは、今後の救出体制をどうしたものかに頭を悩ませていた。

「ヤマイ遮断用通信弾２設置完了。続いて通信弾３の設置に向かいます。」というユイラスの声で、レビンは、我に帰った。

「うむ、こちらも、もうすぐエイン遮断用通信弾２を設置完了する。それぞれの設置が済んだら、同時にエネルギー波を放射しよう。」と、レビンが言った時だった。となりのユイラスの姿がワンゴスの操縦席の中で、大きく飛び跳ねた。

「うぐぁっ！」というユイラスの叫びと、ユイラスの体が壁にぶつかる鈍い音が数度響いた。

「どうしたユイラス！！」レビンはあわてて隣のユイラスを見る。血だらけのユイラスが、痛みをこらえて操縦桿を握り直すところだった。片手で操縦しているが、反対側の腕は、妙な方向に曲がっていた。

「ユイラス！大丈夫か。ユイラス。ユイラス！」レビンの声は叫びに近かった。いくらすぐ隣に見えても、実際にはワンゴスの最大速度でも二十分はかかる距離にいるのだ。手当をしてやりたくても、何もできない。

「め、滅が、急に。推進装置が片方…。」

息も絶え絶えにユイラスが報告してくる。防護服の一部も破け、血が滲んでいる。

「げ、現在位置４２９ｂｂ３９９ｂ６６。ヤマイ遮断通信弾設置しま…。」

ユイラスの報告して来た位置は、ギリギリ、月の電磁波をなんとか八割は防御できる位置だった。最期の力をふり絞り、なんとか任務をこなそうとしていたのだった。

「レインギュネイト放波…。」ユイラスはエネルギー波を放った。三

つの通信弾の間に見えないエネルギー遮断幕が張られた。これでヤマイの命律は、ドンゾーには届かなくなる。

レビンは指揮官として、ユイラスに何か指示を出したかったが、何も言えなかった。命をかけて任務を遂行してくれているユイラスをただ、見ているしかなかった。一言も言葉を出すことが出来ない。

レビンから見えるユイラスの体には滅との接触で破損したらしい、操縦席横の配管パイプが突き出ていた。もう長くはないのは明らかだった。レビンにできるのは、その報告を素直に聞くだけだった。

「連れてこなければ良かった…。」

やっと、レビンが絞り出すように言えたのは、ただその一言だけだった。生身のユイラスをどうして私は。ただひたすらに後悔の念がレビンを襲う。

「いいえ」と言うように、ユイラスが首を横に振るのが見えた。

「あなたの、意識の鎧は、私の息子…。ともに、いるだけで、良かった。はやく…、エインを。」

「そうだったのか…。ありがとう。」

新人類戦士たちと同様、レビンの「本当の体」は、ドンゾーはおろか、ヨハネス３３β宙域にすらなかった。生まれた時から慣れ親しんだ自分の体は、凍結され、戦艦級の宇宙艦でも移動に４年はかかるほどに遠い、王族警備隊本部に眠っている。

レビンは、意識通信を使って、この地にある、命を失った、肉体的に優れた戦士の体に、「憑依」している状態なのだ。それは、優れた指揮者を全宇宙に派遣するために編み出された、必然の技術であった。

辺境地域にこそ優れた救助組織が必要であり、危険な宇宙末端地域への憑依と離脱には厳しい人格的選定と、起動と終了に大変な時間とコストのかかる憑依装置の使用が必要だった。だから、一度憑依した後は何年も離脱できない厳しい任務が待っている。いくら任務が過酷でも、死ぬ事はない。ただし、任地という見知らぬ土地に縛られ、その間冷凍凍結されている本当の体とともに、妻や友人、子供との生活など、「自分の人生」を失ってしまうのである。

死体への憑依任務は、不死という点、高潔なものだけが選ばれるという点からは「意識の鎧」と尊ばれ、死体に憑依するというおぞましさと、実際に任地に赴き、人生を失うという側面からは戦士達に、「棺(ひつぎ)の担ぎ屋」と蔑まれていた。

滅の動きはどんどんと加速していた。もうハーレンシーでの抑制はされない。時間はないのだ。

レビンは気を取り直してエイン遮断用通信弾２を設置すると、続けて通信弾３の設置位置へと急いだ。頭上にリネスン族の赤い月エインがすべてを見透かすように大きくレビンにのしかかっていた。

ワンゴスを停止して、通信弾３を設置したとたんに、レビンのワンゴスも、滅の腕にその姿が取り込まれた。レビンと、ユイラスの亡きがらの通信映像のすぐ後ろに虚無の闇が食い込んでいる。

レビンがレインギュネイト砲を放つための照準を合わせている間に、レビンは身体の半分を滅に食われてしまっていた。猛烈な痛みで、意識が薄らいで行く。

朦朧とする意識の中で、レビンはレインギュネイト放波のスイッチを押すと、意識の鎧から、緊急離脱を行った。